新潟盆踊りのたどった道
～〈うた〉の有り様の変容～

The Path of *the Niigata Bon-odori*

伊　野　義　博
Yoshihiro INO

1　「新潟盆踊り」の変容

新潟民謡として知られている新潟甚句は，もともとは信濃川河口左岸に開けた新潟町を中心に踊られてきた新潟盆踊りから生まれたものである。この新潟盆踊りの様子は，江戸期の新潟奉行川村修就が記した『蜑の手振り』や天保年間に新潟に滞在した江戸の文人寺門静軒の『新斥繁昌記』からも知ることができる。

江戸期の盆踊りの形態は，基本的には戦前まで続く。戦後盆踊り唄は，民謡「新潟甚句」として整えられ，新潟祭りの民謡流しで歌われるなど，隆盛をきわめ，新潟の代表的な民謡として定着した。一方で，芸妓に伝承される「新潟盆踊り」がある。この芸妓の打つ樽を聴いた尾崎紅葉が「短夜の夢なら覚めな樽砧」と詠んだことから樽叩きのことを新潟樽砧と呼ぶようになった。樽はやがて独立して演奏もされる。盆踊りの樽叩きであった永島鼓山は，従来の樽叩きのリズムや奏法を統合整理，新たな創作も加え，踊りとは独立した芸能として「新潟樽砧」を創立し，1968（昭和43）年，新潟樽砧保存会の発足となった。

新潟樽砧とは別に，1969（昭和44）年，新潟商工会議所会頭の和田閑吉の呼びかけにより，小泉光司が中心となり石川県片山津太鼓をモデルとして，万代太鼓飛龍會を結成し，創作太鼓「万代太鼓」が生まれる。このうち「甚句ともえ打ち」は新潟甚句の樽砧をベースにして創作された。

2002（平成14）年になると，よさこい祭りやYOSAKOIソーラン祭りの踊りの影響を受け，新潟のオリジナリティを取り入れた新潟総踊りが立ち上がる。その際踊りの曲として，アレンジャーの松浦晃久による「にいがた総踊り'03」が作曲された。そこには「新潟甚句」のメロディと歌詞が現代風のダンスミュージックとして取り入れられた。2005（平成17）年には，総踊りの核となる踊りとして江戸期の『蜑の手振り』の図絵や言い伝えをもとに「新潟下駄総踊り」が創作され，ここに新潟のアイデンティティを示すものとして，永島鼓山の樽砧が取り入れられる。

2008（平成20）年には，市民の手により，1955（昭和30）年頃から途絶えていた「新潟盆踊り」の復活が試みられている。

このようにして，新潟盆踊りの音楽はそれぞれの時代において形を変容させ，多様な様相を呈して現在に至っている。

本稿では，新潟盆踊りが江戸から平成まで，どのような経緯を経て現在に至っているのかについて，資料や聴き取り調査により明らかにする。この作業により，日本における歌の有り様がどのように変容してきたか，その一旦を浮かび上がらせたい。

2009．6.30　受理

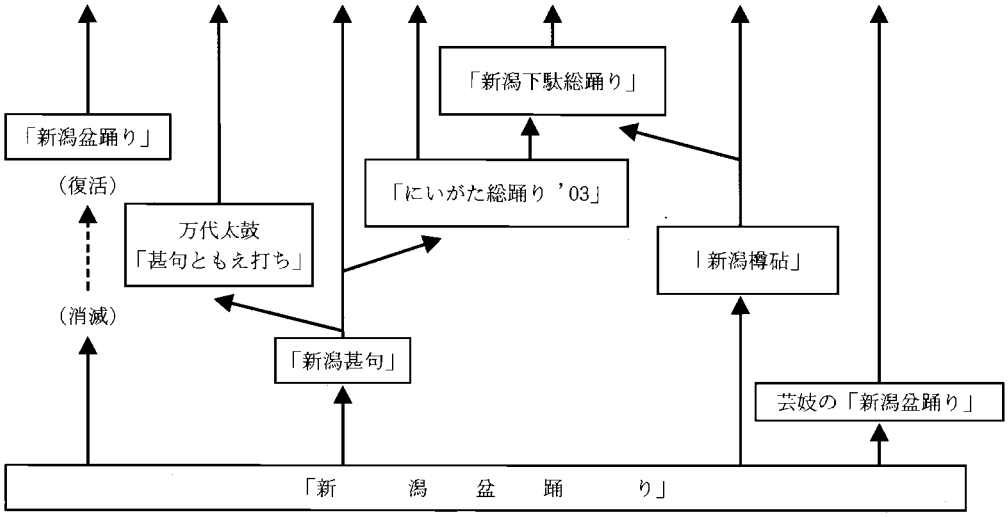


図　「新潟盆踊り」の軌跡

2　江戸期の新潟盆踊り

新潟盆踊りは，信濃川河口左岸に栄えた新潟町を中心に踊られてきた。江戸期の新潟盆踊りの資料としては，新潟奉行川村修就[1)]が1852（嘉永５）年に著した『蜑の手振り』がある。これは，鰯の地引き網をみながら飲食を楽しんでいる「引網の画」，湊祭りで様子を描いた「住吉祭礼の画」，信濃川河口の鮭の地引き網漁の様子を描いた「地引網漁の画」，冬近く鳥屋野潟で行われた「がたがた追い漁の画」，信濃川河口で大型のベザイ船を引き上げる画，それに，夏の新潟町の「盆踊りの画」といった新潟の風俗を描いた６枚の絵に，修就が随想を加えた絵巻であり，当時の新潟の風俗を知ることのできる貴重な資料となっている。このうち新潟盆踊りについて，修就は次のような詞書を遺している。

越後国の盆踊ハ何方にても小児までもよくしれるほとなれは市町村里いさゝか手ふりの替りハあれとも国中なへてのことゝ新潟にては，十四日より十七日迄夜毎に踊り十八日の夜ハ毘沙門島といふ所にて踊ると云暮近くなれは十四五歳の女子ともなとうち揃いひて踊をはしめ月のやゝ高くさしのほる頃にハ老若男女おもひおもひに姿をやつして踊ることなり何ことのたのしきにやいかにも興に入たるさまなりあまりに多くつとゐぬる頃には手ふり袖ふるさへわかすたゝおしおふ計にて大かたハ酔興なるへけれとも物いひさわかしきことなどハさらになしといふ月の更渡る頃もうたひ舞ひてかしましきわさなれともところところのならハしとても憂ることあるものは出すといへはこれもかゝる御代の御恵のたのしさに壌を鼓うつたくひともいひぬへし町中を踊り歩行てそらしらむ頃ミな家に帰ることとそかくて四五日の間ハ昼はいね夜はよもすから踊り夫々のなりわひをうちすててもそれかためにことかくこともなきさまなればたのしミ興するもむへならんかし（新潟市郷土資料館　pp.51-52）

当時の新潟では，14日から17日まで毎夜盆踊りがあり，18日は毘沙門島で踊られた。夕暮れ時からはじまり，月が夜空に高くさし昇るころには，老若男女がそれぞれ思い思いの仮装で姿をやつして踊り，空白む朝方にようやく家路についた。このようにして４～５日の間は，昼は寝て夜になると踊った。それぞれの生業を捨ててもそのために困るというようなこともなかった。

蜑の手振り：盆踊りの画（新潟市歴史博物館蔵）

盆踊りの具体的な様子は，画によりさらに詳細を知ることができる。これには，男女合わせて43人が下駄を履き，踊りに興じているが，修就が「姿をやつして踊る」と書き残したように，ある者は，団扇を持ち，編み笠をかぶり，ある者は赤ん坊を背にし，あるいは仮装の面をつけ，僧侶，漁師姿，奴，女装など，多様な様相を示している。踊る姿もそれぞれがそれぞれの方向を向き，所作もまた統一性は見られない。

43人は，二人の樽打ちによってグループ化されている。樽は，地面に縦に置かれ，打ち手は左手で樽の枠を押さえ，右手で持った桴で叩く。音頭取りらしき者がいるが定かではない。それぞれの樽の周囲には，鉦叩きもいる。鉦叩きの内一人は，手平鉦の形をしたものを両手で持ち，打ち合わせており，もう一人は，当たり鉦をぶら下げ，片手でリズムを刻む。いずれにしても，ここで聞こえる楽器は，樽と鉦で，この二つの組み合わせにより賑やかなリズムが奏されていた。戦前戦後の盆踊りを知っている昭和３年生まれの永島鼓山によると，戦後直後まで時折鉦の音が聞こえ，そのリズムは樽を単純化したものであったとのことである。[2)]

雪汀画「盆踊り図」（新潟市歴史博物館蔵）

「蜑の手振り」の盆踊りの画は作者が記されてないが，絵巻中の別の盆踊りの画には雪汀の印がある。ここには，樽叩きを含め13人が描かれている。樽叩きは，地面に樽を置き，それを左手で支え，右手にもつ小桴でリズムを刻む。隣に音頭取りらしき者がいる。踊り手は，それぞれ思い思いの方向を向き，仮装をしている。個々の自由な踊り方が見られる。輪踊りは確定されない。鉦叩きは，踊りの中で踊りながら鉦を叩く。

また，これより少し前の天保（1830－1844）年間に新潟に滞在した江戸の文人寺門静軒が著した『新斥繁昌記』には，「盆踊」と題した一文があり，次のように当時の様子を垣間見ることができる。

- 14日から15日の一連の三夜，男女混じって団欒舞踏した。
- それぞれ新たに衣を裁ち，争って装束を美しく，紅や紫の袖が翻る。隊を結んで競って舞う。
- 手を振り脚を捻（ねじ）り，矩を履み，節に合わせて踊っている。
- 謳（うた）も亦一曲節に過ぎない。声の美しい者が一人音頭をとり皆がそれに従って和す。
- その歌詞には，数種ある。その一つは「御祭渠より白山祠まで」といったものである。
- 歌が窮まってくると土音は究めて淫らになり，いわゆる桑中すなわち桑畑の中の密会のごとくである。
- 狎妓すなわち馴染みの芸妓と連れだって鴛鴦（おしどり）のごとくしている者もある。
- 幼児少年のみならず爺も狂い婆もまたひっくり返るようにして踊っている。
- その服装であるが，それぞれ新しい衣を裁てて装束の美しさを争っている。それができない者は，仮装して，袈裟を着て僧になり，長袖を着てひるがえし，あるいは竹篭を負い，ムシロを被っている。奇怪百出でそれぞれ笑いを取っている。

・七十四の橋は将に踊り場と化している。

『民俗藝術一ノ八』の口絵には，書家の錦水が描いた安政（1854－1859）年間の「新潟港盆踊図」を見ることができる（民俗藝術の会　1928）。

ここでは，樽叩きと音頭取りを内側にした時計回りの輪踊りとなっている。樽叩きはやはり一つの樽を地べたに伏せて左手で押さえ，腰を屈め右手に持つ桴でリズムを打っている。その脇に団扇を持った音頭取りが立つ。周囲の踊り手は，男女入り交じり，下駄履きで，その衣装は，種々の仮装である。深編笠をかぶる者，手ぬぐいで顔を覆う者，扇子を持つ者など様々である。踊りの手の表情をみると腕を横に出す者，両手を上に上げる者，手首を曲げる者など様々で，足の動きも，右足を出す者，左足を出す者，あるいは，片足を上げた瞬間の者などが見られる。踊りは統一されてはいなく，樽に合わせて思い思いの踊り方を楽しんでいることがわかる。

1864（元治元）年に著された紀興之の『越後土産』は「里振りうた」として「新潟盆うた」の歌詞を紹介している。これによれば，「御祭堀から白山迄も　のぼりつめたら身をうつの山」「今よひひと夜はどんすのまくら　あすはおぶねの波まくら」とある。堀でめぐらされていた新潟町や廻船や漁業を生業とした人々の生活から生まれた言い回しである（紀　1864）。

3　明治～昭和前期の新潟盆踊り

盆踊りは，明治になると風紀上の理由から，県令楠本正隆が1873（明治６）年，県令永山盛輝が1879（明治12）年，県知事勝間田稔が1898（明治31）年に禁止令を出す。にもかかわらず踊りは止むことなく，普段のレクリェーションとしても楽しまれるようになっていった。こうして，樽が使われ，そのリズムによって踊るという江戸期からの盆踊りの形は，基本的に明治から昭和まで，続いたものと思われる。

『新潟のまち　明治・大正・昭和』に，明治中期，浜辺で盆踊りを楽しんでいる婦女子の様子の写真が掲載されている（新潟日報事業社　1972）。

輪踊りの輪の右内側に樽が一つ置かれ，子どもから大人まで，あるいは子守をしている女性が，樽のリズムに合わせて踊っている。『蜑の手振り』に描かれていた鉦は見られないが，輪の向き，樽叩きの位置等，安政年間の錦水の構図とほぼ同様である。

こうした楽しみとしての盆踊りは，大正期を経て盛んになり，盆の季節に限らず，年中の催しの中に入り込んでいく。例えば，1912（大正２）年８月25日の新潟新聞では，川開きの祭典に興じた若者が市内各所で盆踊りを踊る様子が次のように報じられている。

「浜辺の盆踊り」『新潟のまち　明治・大正・昭和』新潟日報事業社

一作日は夜に入りてより各町内を通じて殆んど人を以て埋り殊に若者連は恰も千載一遇の事とて思ふさまに騒ぎ廻り東新道市山師匠側四ツ角の如き交通を杜絶せしめて盆踊りを始め又た本町通り十番町及び上大川前等各所に盛んに盆踊りを開始し其筋の警戒も大川前に集中したる事とて之を好機に狂せん許りに跳ね廻りたり

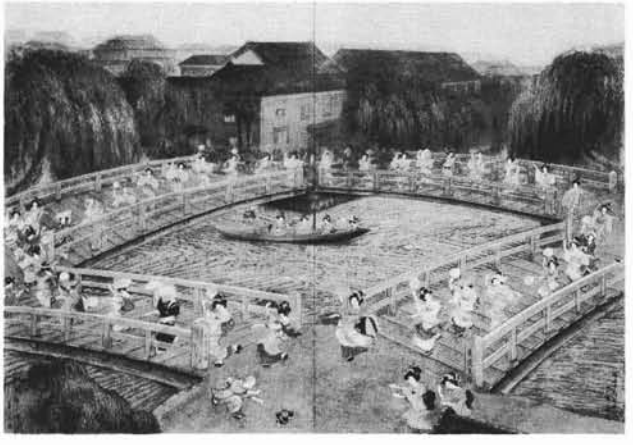
1923（大正13）8月の新潟新聞には，次のような記事が見られる。

博覧會の盆踊大会　仮装者に懸賞　（羽越線全通記念博覧会）
記念博第二會場内に開催の新潟名物盆踊り大會は場内休憩所並に特設館出品人の発起新潟毎日並に本社の後援の下に，四，五，六日（雨天順延）開くことに決したことは既報の如くであるが當日は古町芸妓北廓芸妓の参加は勿論一般入場者は何人も参加随意で仮装者は続々これに参加するもので新潟市内の催しとしては空前のことである～後略～

このように盆踊りは，ハレの日のエネルギー発散の場として，盛んに踊られた。
盆踊りはまた，新潟の風情を表すものとして，柳や下駄履き，橋上で響く足音に代表される橋上盆踊りの情景と結び付いていった。
勝見龍の著した『新潟短古』には「橋上盆踊」と題して次のような漢詩が見られる（勝見　1918）。

舟江柳暗渠多　八十八橋亦不過　恰好子女相舞踏　暑日欲暮板聲和

「暑日暮れんと欲して板聲和す」とあるように，盆踊りは柳と堀の街，新潟の風情としてみられるようになっていった。
1934（昭和9）年発行の新潟市史では，「夏季の行事なるを以て，踊子は軽き浴衣を着流し，笠を被り，手拭いを頬冠り，又仮装・変装等して下駄を穿ち，神社・寺院の境内に於て踊る。特に橋上を選びたることもあり。この橋上を選べるは橋板を踏む音の面白きに因れるが，新潟の如く橋多き水郷にして初めて自然に工夫せられたるものなりと云へり。踊子が大集団をなして踊る場合には楽器として笛・太鼓・三味線の用ひらるるは勿論なるが，空樽を細長く小さき木槌にて打ち，拍子・調子をととのふるの基調となす。」とある（新潟市役所　1934）。
こうした背景には，次のような新潟の事情も関係しているだろう。以下は，新潟毎日1928（昭和3）年8月16日の記事である。



銅谷白洋画「新堀四ツ橋の盆踊り」（新潟市郷土資料館蔵）

新潟は女の町恋の町とは古くから全国的に知れてゐたのであったが，此の節は新潟県の首府として産業方面に文化方面にと町其ものの模範的発達をみなければならぬから昔ながらの看板ではあるが掛け替へねばならぬと云われてゐるが，裏面的的に調べて見ると仲々夫處ではない。五百年も六百年もの昔から綿々として伝はる歴史はどう一朝にしてくつがへされるべきものではない。夫は市の全戸数二万三千五百戸のうち女世帯の戸数が三千百六十戸で全戸数の一割三四分をも占めてゐるのを見てもほぼ歴史の廃れないことを窺ふことが出来ようが，更にこの女世帯のうち一家を構へてゐるお妾さんが約五百戸間借り其他のお妾さんが約百五十戸でお妾さんの世帯が六百戸もあり又芸者屋待合貸座敷料理屋等の女世帯のものも約七八百戸に達してゐるを見ればいよいよ明瞭に所謂女の街たることを裏書きしてゐるものと云ふことが出来よう。其他の世帯は大抵賃仕事に従事してゐるもので仕立屋袋張り等の仕事で渡世してゐるものである。尚新潟市で四年前に調査した時は二千三百戸であったのがこの四年間に約千戸を増してゐるのであるが之は人口の増加とともに自然増加を見たもので女世帯の増減は主として景気不景気に正比例して現れるものであると云われてゐる。

こうした一方，盆踊りを卑猥なものとしてさげすみ，芸術的価値の高いものを求め，盆踊りそのものを改変しようとする気風もあった。

1928（昭和３年）８月17日の新潟毎日には，野口雨情作詞中山晋平作曲，藤間静枝振付による新作民謡「新潟港踊」を祝した紹介記事が掲載されている。そこでは，「新潟港踊」を「郷土芸術」とし「従来世間に唄はれてゐる卑俗な所謂民謡に比し稀に見る芸術的香気の高いもの」と絶賛している。また，青年団や婦人会員も絶大の賛意を表し，新潟の郷土芸術を紹介する際これまで「適当なものがなくどこへ行っても赤い顔をせねばならぬ破目に陥るのが常」だったので「どんなに嬉しいか知れません」と述べている。さらに，８月20日になると「無限の境に魂を魅した郷土芸術歌舞の夕べ」と題した記事が掲載されている。港踊りを「港踊りの花やかさ，美しさ，その美しい中にも港の情緒が融込み織込まれて如何にも新潟の景情目のあたりに浮ぶ…中略…満場の群衆は只々恍惚として其の美，其の技に陶酔するばかりであった」と絶賛している。

く抜り踊でま朝
岸海の丑用土たつ賑

1946（昭和21）年７月25日の新潟日報

続く文章には，佐渡立浪会の村田文三の歌う「佐渡おけさ」についての「姿態の豊かさ，唄の美しさ喝采しばしやみさうもない村田文三氏の男性的な唄は或は北海の怒涛を思はせ或は春日の熙とを思はせ聴衆喜ぶこと限りない」の賞賛も見られる。村田文三の歌う佐渡おけさは，1926（大正15）年，愛宕山の東京放送局（現ＮＨＫ）からラジオ放送をするなと，すでに全国クラスのものとなっていた。この佐渡おけさは，新潟毎日新聞社で行った県下の郷土芸術人気投票でも第１位となっている。

笹川勇吉の『新潟の町　新かわらばん』によると，村田文三は，1931（昭和６）年２月11日，「舟江情景同人社」主催による「佐渡おけさ公演会」に出演し，「押すな押すなの大盛況」であった（笹川 1995）。なお，この年の８月の新潟まつりを訪問された昭和天皇の弟澄宮殿下の御前でも唄を披露している。しかしながら，ここに新潟盆踊りは登場しない。先の記事にあるように，新しく創作された「新潟港踊り」や洗練された「佐渡おけさ」が「従来世間に唄はれてゐる卑俗な所謂民謡に比し稀に見る芸

術的香気の高いもの」であり，新潟の郷土芸術を紹介する際これまで「適当なものがなくどこへ行っても赤い顔をせねばならぬ破目に陥る」状態を生んでいたそのものとして扱われていたのである。

さて，浜辺で盆踊りを楽しむ風習は，戦後まで続いていく。毎年土用丑の日には，海水を浴びると一年中風邪をひかないといわれ，その際浜辺でさかんに盆踊りが踊られた。往時の様子を，1946（昭和21）年7月25日の新潟日報の記事は，次のように記している。

B29と日本軍閥の重圧から解放された戦後初めての土用丑の日の新潟はその前日廿五日の午後から海岸を中心に大変な騒ぎ。“押せや押せ押せ下ノ関までも，押せば新潟近くなる”…中略…廿五日の夕がたから土用丑の日の朝にかけ，夜もすがら踊りぬこうと市内はもちろんのこと新津から亀田からワーンと繰り出した人の波は新潟の浜にあふれ夜更けとともに火はいよいよあかく踊りの輪はますますふくれ，浮世の苦労もこの一夜は松吹く風と唄ひかつ踊る若者の頬に磯の香が匂ひ“新津松坂”や“佐渡おけさ”まで飛び出す景気に樽砧の音がひゞく。
海岸にはズラリとおでん屋や濱茶屋がみせをならべこの夜濱をうづめた人の波は無慮数万。

新潟盆踊りは，樽を打つこと，樽のリズムで踊ることが特徴である。『蜑の手振り』では樽は地面に置かれ，打ち手は左手で支え，右手に桴をもって叩いていた。この演奏の仕方は，後に桴を二つ持つ両手打ちへと変わっていく。
沢村洋編著『新潟の街　歴史散歩』には，「夜の新潟　舟江情緒盆踊り　（於　遊郭）」「錨　下ろせば，早気が勇む，花の新潟に，樽の音」と添え書きのある，昭和前期と思われる樽打ち連中の集合写真が紹介されている（沢村　1978）。ここでは樽は地面に直接垂直におかれ，打ち手は腰を屈め，両手に桴を持って，樽の外側を叩いている。両手打ちにより，樽のリズムは次第に複雑化技巧化していった。
さて，戦前，戦後直後までの盆踊りの具体的な様子については，古老のインタビューでその実際を知ることができる。

盆の頃には，新潟町下町には，曙公園や願隋寺など数カ所で盆踊りが行われた。樽を真ん中において輪をつくって踊った。樽のリズムに合わせておどるが，その振りは，現在のものと比べて個性があり自由なもの

昭和前期と思われる樽打ち連中の集合写真
沢村洋編著『新潟の街　歴史散歩』新潟日報事業社

であった。踊りも「極端にいうと，私は私でここで踊って，そちらはそちらで踊る。」また唄も「同じ輪の中でも勝手に唄っている。」というふうであった。現在のように拡声器がない時代，踊りの輪のあちらこちらで唄が生まれていた。聞こえてくる音の中心は，樽打ちが打つ樽の音で，そこに唄が加わる。時に鉦も入って賑やかだった。たまに笛も入ったが，踊るという上では重要ではなかった。唄の出だしは「ホェー」が多かった。「エーェヤー」というのもあった。歌詞は，例えば，「エーェヤー腹のでっけぇかか，チョイトでんぐるまにのせて，二百十日のコイツァマタエエかぜよけよ」や「ホェー　新潟やけても　チョイト鍋茶やコラやけぬ　焼けぬはずだもコイツァマタエエ鍋じゃもの」などのようなものであった。囃子言葉として「アーワッチワチーワチワチー　アースッチョイバケツガ十三銭ヤスイトモッタラソコヌケダー」といったものがさかんに入った。卑猥なものがたくさんあった。

戦時中は当局の取り締まりが厳しくなったが，最後まで残っていたのは，曙公園での盆踊りだった。盆踊りをしていると警察がきて樽叩きを捕まえていく。そうすると一時踊りはなくなるけれどもまた，いつのまにか再現された。[3)]

盆踊りの樽は，踊りの中心であり踊りをリードする重要な役割を果たしていた。「樽叩きの巧いい人が叩くと，踊り手も活気もちがって来て，踊り手の輪がいつの間にか自然と大きくなって来ますし，樽叩きの下手な人が打つと一人減り二人減り最後には盆踊りが潰れてしまったり」するのである（永島　1994）。

当時盆踊りの会場を渡り歩いき，樽を叩いていた永島は，次のように語る。

打ち手は振りをつけて打っていたし，打ち方（リズム）もいろいろあった。踊る場が狭く，踊りの輪も小さい所では，打ち手は一人で十分で，自由に打つことができた。そんな時は，自分流で打った。しかし，大きな所では，６人くらいの叩き手が交代して打つので，勝手なことはできなく，いわゆる正調打ちをした。また，夜遅く（朝の３時くらい）になると先輩が，「こういう打ち方がある」といっていろんな打ち方を教えてくれた。こうして，たくさんの種類の打ち方を覚えていった。[4)]

4　戦後の新潟盆踊り　～新潟盆踊りから新潟甚句へ～

樽叩きを中心として自由に歌い踊る新潟盆踊りに変化がおとずれ，いわゆる「新潟甚句」と呼ばれるようになるのは，昭和の声を聞いた頃である。これには，1932（昭和７）年に「節美会」を設立し，新潟で民謡の中心的な活動を行っていた鈴木節美の働きが大きい。

新潟甚句というのは，今から五十年前，昭和の七，八年頃まではデタラメだったんですね。遊郭の道路などで踊られたりして，樽の音に合わせて拍子をとってデタラメに踊っていたんですけども，ちょうと昭和七，八年頃，宮様がおいでになられまして，市役所で，宮様の一晩のおなぐさめに何がいいかと。…中略…その時私はデタラメな事は出来ませんので，唄も踊りも現在歌われて踊られているような基本を作った訳ですね（鈴木節美　1983 p.7）。

鈴木節美から見ると樽の音に合わせて拍子をとるだけのデタラメな盆踊りが，この時に宮様（東伏見宮大妃殿下）にも見ていただけるように洗練された「新潟甚句」として整理されてきた。鈴木は新潟市からの依頼で，青年団員二十数名に新潟甚句の踊りを教え，任を果たし，この時の改変をもとに新潟甚句を完成させている。こうした動きの背景には，次のような考え方が見られる。

私は今でも思うんですが，盆踊りの歌詞ももう少しいいもの使って，そして少し明るい所で，もう少し綺麗に踊れとかいうふうに育ててゆけばよいんですけども，そういう事をしないというのは日本人のどうした癖なんでしょうか（鈴木節美　1983 p.4）。

では，盆踊りは具体的にどのように変化し，「新潟甚句」となっていったのであろうか。

盆踊りでは出だしがホワイーと歌われていたが，それを鈴木節美が民謡としてのうたい方の構成上，自然を元にした観点からハアーに優る音はないということで，ハアーという出だしに変え，歌詞も卑猥なものはのぞき，リズム，曲調も整理されて一般に普及し定着した（新潟市民謡連盟　p.209）。

出はハァーと出るが，譜で示すようにハァーと延ばしてァァと二つの準備の小節を入れて，途中も一つ，そして三つのァァァで止める（鈴木節美　1969 p.3）。

新潟甚句のハヤシは歌の切れ場へ，ハァー　アリャサ　アリャサとかける。後句の終わりにも同じ言葉でかける（鈴木節美　1969 p.7）。

このようにして「決まった型がなかったこの盆踊りを拍子にあった，健康的な踊りに」（新潟市民謡連盟　p.29）という考えを基本にして，現在の新潟甚句の原型を作り上げられた。多様な踊り方や自由な歌い方が，拍子にあった健康的で美しい踊りに統一される。すなわち

- 出だしの「ホワイー」が，「ハアー」となり，それに従い，下降的な旋律が上昇的なものとなる。そして，旋律が一本化される。
- 拍子におさまった歌い方が基本とされる。
- 囃子の言葉，挿入の場所が決定される。
- 歌詞は卑猥なものを除き新潟情緒に適したものが選ばれる。
- 樽のリズム，笛の旋律が一本化され，固定化される。また，入るタイミング，歌との関係も定められる。
- 踊りは，円をつくり時計と反対回りとする。
- 踊り方が統一され，例えば「左手，左足より出て，右足出て，左足トン，右足右へ踏みかえて～」（鈴木節美　1969 p.23）のように規定される。この踊りは，「立派な芸術として仕上がる様に研究す可きで有る。」（鈴木節美　1969 p.23）とされる。

こうして「従来の盆踊りなどで見られた卑猥なものから，正調民謡，健全な踊り方がとりあげられ」，「節美会はその後踊りも始め，多くの催しに出演した。そして，自由にうたって，踊って楽しむ民謡から，見せる踊りの研究にも力を入れた。」のである（新潟市民謡連盟　p.29）。

小寺融吉の『郷土民謡舞踊辞典』によると，「新潟甚句」と「新潟盆踊り」の２項を確認ことができる。前者では，「新潟のうた。字数いろいろあり。」として，「宵の間にかはる，男心と秋の空」。「真光寺干柿，七つむいたら夜があけた」。「新潟の川まんなかに，あやめ咲くとは，いぢらしや」の歌詞が紹介され，後者では，「新潟は近頃でこそ川は次第に埋められてきたが，元は橋が多いので有名であった。そこで以前の新潟の踊りの特色は，橋の上で歯の低い足駄で踊り樽太鼓に合わせて下駄の音を聞かせたことであった。」といった説明がなされている（小寺　p.354）。「新潟盆踊り」と「新潟甚句」との関係性については，触れていないが，新たな歌の存在として「新潟盆踊り」と区別された「新潟甚句」が記されていることは興味深い。

5　民謡流しへ　～新潟甚句と民謡流し～

新潟盆踊りに次の変化が訪れるのは，1955（昭和30）年の頃である。これには，３つのポイントがあげられる。第１は，戦後の公民館の誕生とその活性化である。昭和21年，新潟市内小学校区ごとに設置された18の公民館の活動は活性化し，民謡やフォークダンスなどがさかんに取り上げられていく。民謡は「従来の盆踊りなどで見られた卑猥なものから，正調民謡，健全な踊り方が取り上げられ」（新潟市民謡連盟　p.31），新潟甚句は，佐渡おけさ，新潟おけさなどとともにさかんに取り上げられていく。第２に戦後の民謡ブームを背景に，その母体となる民謡団体が次々と設立されていったことにある。新潟では，先の鈴木節美による節美会の他に，「民謡いづみ会」（岩崎文二），新潟民謡研究会（富山勝太郎），わかば会（神田己之松）などの民謡団体に加え，国鉄，新潟鉄工，日本石油，新潟交通などの職場団体があった。第３に，それまであった，住吉祭，川開き，商工祭，海港記念祭といった４つの祭りが統合され，あたらしく「新潟まつり」とし

て始まったことである。

『新潟市民謡連盟三十年の歩み』によると，1955（昭和30）年の第１回新潟まつりでは，公民館団体，民謡団体，職場団体など30ほどの団体700～800名ほどが参加し，「白山神社に集まり，一の鳥居からスピーカーをつけた放送車を囲むようにして，二〇～三〇名の一団ずつ三〇米位の間を置いて次々に発進して，古町を下ってゆき，坂内小路で解散。踊りは好き勝手，ある意味では幼稚で楽しいもの」（新潟市民謡連盟　p.33）であった。

まつり終了後，参加団体が集まり「新潟民謡クラブ」が発足し，これが翌31年４月「新潟市民謡連盟」となる。所属団体は，「新潟民謡研究会」「節美会」「民謡いづみ会」「わかば会」「扇会」「国鉄民謡部」「日東硫曹民謡班」「新潟交通民謡研究会」「日本石油民謡班」「中北車体工作所民謡部」といったものであった。

この新潟市民謡連盟が，新潟まつりの民謡流しに組織的に取り組むこととなる。「これまでの土の匂いのついた生まれたままの古い民謡の型では通用しない」（新潟市音楽芸能協会　1977 p.998）「統一のない団体毎の流しでは物足らず，しかも見物人が一緒に踊れる曲をある程度限定してはどうか，新潟甚句の踊り方を統一して有線放送とすれば，もっと多くの市民が参加出来るのでは，」（新潟市民謡連盟　1985 p.33）といった意見の中，それまで右回りと左回りの双方があったものを左回りに統一し，33年には，有線放送による縦流しの民謡流しが実現する。1,400人でスタートした民謡流しが35年頃には3,000名になる。こうした中で「“民謡は下品だ”卑しいというこれまでの評価が次第に消えていった。」（新潟市音楽協芸能協会　p.999）

6　もう一つの流れ　～新潟芸妓の盆踊り～

新潟は，寺門静軒が「幾十の桜閣夕べに燈火星を點ずれば満街昼の如く正に妓廊第一等の処なり」と評した所である。新潟湊は，北前船の寄港地として繁昌し，料亭が建ち並び花柳界が栄えてきた。静軒の盆踊りの項には，「冶遊之子必携狎妓往（冶遊の子必ず狎妓を携えて征く）」とあり，馴染みの芸者と連れだって盆踊りを観に行く旦那集の様子が紹介されている。こうした中で，新潟盆踊りは，花柳界に入り，芸妓の新潟盆踊りとしても伝えられてきた。その踊りと歌は，見せる芸として洗練され，民衆のものとは異なったものとなって現在まで伝えられている。

芸妓の盆踊り唄は，『復刻　日本民謡大鑑』（日本放送協会）に古町芸妓千代菊による1943（昭和18）年の録音が残されている。現役芸妓とし菊によると，この盆踊りは，新潟の踊りとして宴の最後に，輪の中に樽，三味線，笛を配置，その周りでにぎやかに踊るとのことである。合いの手も「ハァアリャアリャアリャアリャ」となり，歌詞も「新潟恋しや」などの品の良いのを歌い，一般の人が歌う浜の歌とは違うと指導されたという。千代菊はとし菊の唄の師匠であるが，取材時，実際に歌っていただいたところ，その節回しは，千代菊と同じであった[5]。こうして，芸妓の盆踊り歌は現在でも受け継がれている。

新潟美人盆踊り

7　新潟総踊り　～新潟下駄総踊り～

「新潟総踊り」は，新潟商工会議所と若者有志を中心とした「新潟総踊り実行委員会」により，新潟発信の事業として2002（平成14）年に始まった。当時全国的な広がりをみせていた「よさこい」系の踊りに刺激されながら「蜑の手振り」に象徴される新潟のもつ自由な踊りのこころを再現しようとしたものである。民謡，ジャズダンス，ヒップホップ，コンテンポラリー，創作ダンス等ジャンルを問わない踊りの参加が認められている。2008（平成20）年の場合，９月13日から３日間に，出演チーム250団体，総勢１万２千人による大規模な踊りの祭典へと発展した。

その踊りの曲として，2002（平成14）年の開始時に，作曲家・アレンジャーである松浦晃久による「にいがた総おどり'03」がお披露目され，翌年には，第１回目の「にいがた総おどり」を迎えている。そしてこの「新潟総踊り'03」に取り入れられたのが，「新潟甚句」である。現代風のアレンジがなされ，アップテンポのリズムをベースに女性の歌うハイトーンの「新潟甚句」が歌われる。「新潟甚句」の選択は，新潟発のオリジナルの踊りとして新潟の地域性を意識したもので，翌年の「新潟総踊り'04」では，「新潟舟方節」が採用されている。しかし，2005（1993）年以降からは，新潟の伝統的な歌は用いられなくなる。

一方，この「新潟総踊り」の中で，新潟らしさを表現するコア的な存在として，2005（平成17）年新潟総踊り祭実行委員会が「新潟下駄総踊り」を創出した。これは，『蜑の手振り』の絵巻物の世界を再現・復活をコンセプトとしたもので，踊り手は，伝統の小足駄を履き，「新潟樽砧」のリズムにのって踊る。ここで用いられる「新潟樽砧」は，「新潟盆踊り」で樽叩きが叩いていた樽のリズムを取り入れ再構成したもので，「300年前の誇りと湊町の情熱」を表現する。

2008（平成20）年のオフィシャルガイドブックよると「あなたが幸せでありますように」「希望を持ち，願いを持ち，祈り，夢を持ち」「世界中に，願いを，懇親こめて」といったコンセプトが提示されているが，これは踊りという行為のもともとの意味につながる「祈り」の世界を表出しているという（新潟総踊り実行委員会）。

こうして，「新潟総踊り」では，新潟を表現する核として「新潟下駄総取り」をおき，踊りの持つ「祈り」の世界を表出しながら，あらゆるスタイルの踊りを包含し，新潟から世界へ発信する祭りとして広く展開することを目指している。

8　新潟盆踊りの復活

2008（平成20）年，新潟では新しい動きが起こる。市民の手により，昭和初期の盆踊りの復活が試みられたのである。「昔ながらの地域の盆踊りを応援する会」（堀川久子代表）による。地域にある盆踊りのよさを再発見し，より多くの人に広め，継承することを目的として2006（平成18）年に発足した。

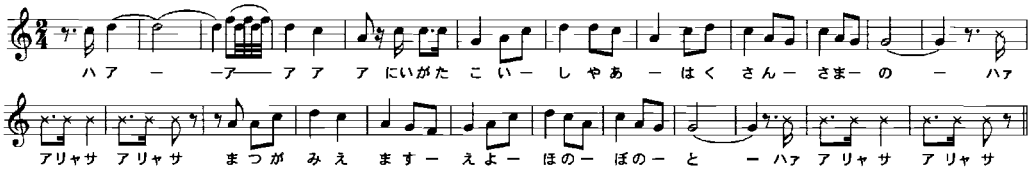
2008（平成20）年７月19日，この「昔ながらの地域の盆踊りを応援する会」は，新潟市歴史博物館において，昭和初期の盆踊りを復活させ，当時の踊りや歌の再現を試みている。「新潟甚句」による盆踊りとは異なった戦前の踊りと歌がよみがえったが，歌う際にとまどいも見られた。それは，踊りの場面において，状況に応じた歌詞の発信や発せられた歌に対する囃子のあり様など，かかわり合いの実際が古老以外にはわからなかったことである。歌い手と囃し手，踊り手が一体化して成立していた〈うた〉の世界の関係性が自然な形で表れてこない。〈うた〉の形は復活されたものの，現代人にとって「会話」の方法（鈴木棠三　pp. 130-131）として〈うた〉を用いることは困難になってきている。復活された盆踊りは，2009（平成21）年，新潟市主催の「水と土の芸術祭」前夜祭でも踊られた。

9　唄の多様性

これまで，説明してきた新潟盆踊り唄について，ここで現在音源として残っているもの，取材により収集できた唄を五線譜にして示す。採譜はすべて筆者による。比較しやすいように，必要に応じて移調して示した。

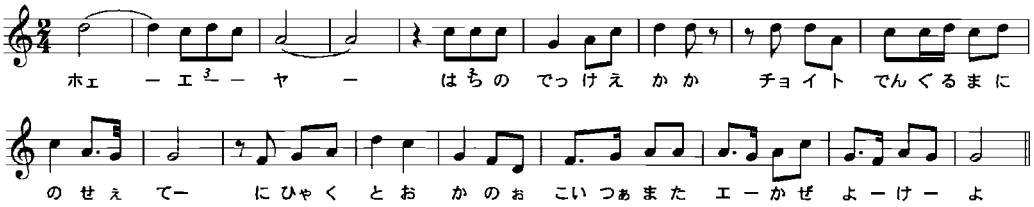
① 鈴木節美

鈴木節美の新潟甚句，『復刻　日本民謡大観　現地録音ＣＤ　中部篇１』（日本放送協会）による。開始音の実音は，一点変イ。鈴木により統一甚句とされたこの歌い方は，現在の新潟祭りの民謡流しの新潟甚句にそのまま引き継がれている。現在新潟甚句といえば，この歌い回しである。



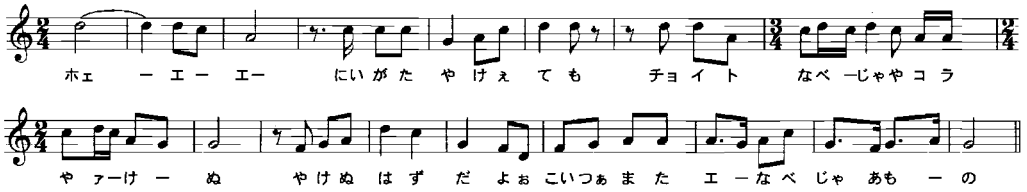
② 長谷川守英

1935（昭和10）年生まれの長谷川守英による新潟盆踊り唄。開始音の実音は，一点変ニ音。＜ホェー＞の出だしが特徴的である。唄の途中に＜ちょいと＞＜こいつぁまた＞などと入る。



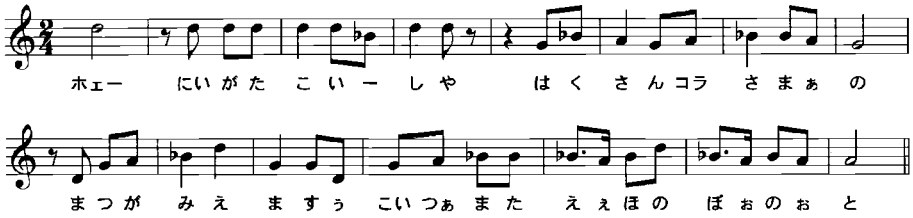
③ 佐藤順一

1928（昭和３）年生まれの佐藤順一による新潟盆踊り唄。開始音の実音は，一点変ニ音。節回しは，②の長谷川のものに類似。＜ホェー＞の出だし，唄の途中の＜ちょいと＞＜こいつぁまた＞も共通している。



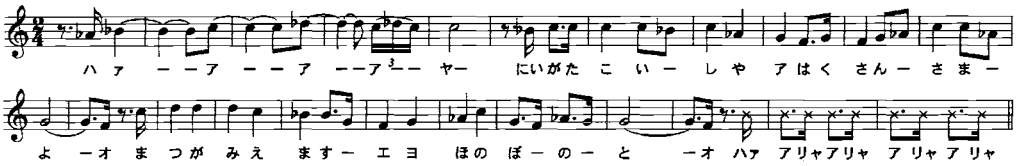
④ 永島鼓山

佐藤と同じ1928（昭和３）年生まれの永島鼓山による新潟盆踊り唄。開始音の実音は，一点ニ音。長谷川，佐藤と同時代のものであるが，開始は素朴な出。②③と比較しても音組織が異なる。



⑤ 千代菊

芸妓千代菊による新潟盆踊り唄。『復刻　日本民謡大観　現地録音ＣＤ　中部篇１』（日本放送協会）による。開始音の実音は，一点変イ。1943（昭和18）年の録音。洗練された細かな節回しとなっている。新潟芸妓の間では，現在でもこの節が伝えられている。



譜例②③④に見られるように，昭和初期の盆踊り唄は，個々に共通性は持つものの，歌い手によってそれぞれ個性的な節回しで歌われていた。音組織で言うならば，②③のタイプと④のタイプが見受けられる。これに加えて洗練複雑化された芸妓の盆踊り唄が存在し，現在まで歌い継がれている。

これらの唄を参考に，戦後鈴木節美は，統一甚句として　を発表する。そしてこの節の統一は，前述したように，合いの手の入る場所や合いの手の言葉そのものの統一も意味した。これまであった自由な即興性よりも，決められた旋律を技巧的に歌うことが重視されてくる。

10　歌詞と囃子ことば

今回の取材で古老から聴き取った新潟盆踊りの歌詞と囃子ことばを示す。前項②③④の節にのせて歌われた。

1）　歌詞

○ホェー（または，「ホェーヤ」など）

- 新潟砂山チョイト米なら（コラ）よかろ　沖の（又は可愛い）船頭さんにコイツハマタエー積ませたい（以下カタカナ部は省略）
- 樽を叩けば　佐渡まで　響く　夏は寄居の　浜踊り
- しもへしもへと　流れる　水は　にがた（新潟）じょろしゅう（女郎衆）のけしょ（化粧）の水
- 親は番太郎　子どもは　こもかぶり　親子揃って　寝ずの番
- チャンコ茶屋のかか　させそで　させぬ　させぬ筈だよ　孔がない
- させて悔しや　浜辺の　野郎に　孔のどん底まで　砂だらけ
- サネの頭に　白粉　付けて　おやじ見てくれ　富士の山
- サネの頭に　せんこ（線香）三本　立てて　おやじ見てくれ　浅間山
- サネの頭に　コンペト　のせて　しょんべ（小便）はじいて　みずぐるま（水車）
- お前来るかと　橋の欄干に片足ふんがけて　片きん（または片まん）はみだし※　川下　見れば　川原柳の影ばかり　（※下線部は，囃子ことば）
- せがれどこへゆく　青筋　立てて　生まれ故郷へ　種まきに
- あまりしたさに　猫のこと　やったれば　親をひっかくような　子ができた
- あまりしたさに　巡査さまと　やったれば　親を縛るような　子ができた
- 腹のでっけぇかか　でんぐるまに　のせて，二百十日のかぜよけよ
- 新潟焼けても　鍋茶屋　焼けぬ　焼けぬはずだも鍋じゃもの
- 裏のわかいめっと（夫婦）　働き者よ　今日も夜なべで　子づくりよ
- 姉は十四番町　妹は常盤町　おかか（または「親は」）　新島町の　こもかぶり

2）囃子ことば

- あっちゃえマンジョおっけた　あねさの方からおっけた　こんげえ良いこと再々ねい（ない）再々あったらたまらない　三度のまんまも食いあげだ　ゴッシゴッシー
- あっちゃえ盆だショッキ（生気）がない　醤油の実はうんまえろ　アーワッチワチーワチワチー
- アーワッチワチーワチワチー　アースッチョイばけつが十三銭　安いともったら底抜けだー　アーゴッシゴシーゴッシゴシー

11　おわりに

以上，江戸期から平成の時代まで，新潟盆踊り唄の軌跡をたどってきた。戦後，昭和30年あたりを境に唄はその形も有り様も劇的な変化をもたらしている。踊りとの密接な関係性の中で自由な即興性を持ち，歌い手や踊り手の「会話」の方法として機能していた唄は，「卑しく，下品な」ものから「芸術性の香り」がするものへと変わり，大衆に受け入れられていった。一方，唄が本来的に持っていた共感的な様相は薄れ，踊りと唄の関係性も変化した。「新潟甚句」は，地方によって歌われる「歌」となったのである。

こうした唄の有り様の変化がどのような意味を持つのかということについては，別稿にて考察したい。

（本稿の取材に当たっては，舞踏家の堀川久子，にいがた総躍り総合統括の能登剛史，新潟芸妓のとし菊，昭和初期の盆踊りを知る永島鼓山，長谷川守英，佐藤順一の各氏にご協力をいただいた。）

注

1）1795年（寛政７年）～1878（明治11）年
2）2008（平成20）年６月26日，インタビューによる。
3）2008（平成20）年６月26日，佐藤順一（昭和３年生まれ），永島鼓山（昭和３年生まれ）長谷川守英（昭和10年生まれ）へのインタビューによる。
4）2009（平成21）年２月１日，永島鼓山へのインタビューによる。
5）2009（平成21）年２月20日，とし菊（大正15年生まれ）の演奏及びインタビューによる。

引用文献

勝見龍『新潟短古』小林晋三郎発行，1918（大正７）年
小寺融吉『郷土民謡舞踊辞典』，名著刊行会，1974（昭和49）年
笹川勇吉『新潟の町　新かわらばん』考古堂書店，1995（平成７）年
沢村洋編著『新潟の街　歴史散歩』新潟日報事業社，1978（昭和53）年
鈴木節美『新潟の民謡』鈴木節美発行，1969（昭和44）年
鈴木節美『鈴木節美の民謡雑話』鈴木節美発行，1983（昭和58）年
鈴木棠三『説話民謡考』三一書房，1987（昭和62）年
寺門静軒『新斥繁昌記』年代不詳，寺門は，1796（寛政８）年生，1868（慶応４）年没
永島鼓山「新潟樽砧」新潟樽砧保存会，1994（平成６）年
新潟市音楽芸能協会編『新潟市音楽芸能史』新潟市音楽芸能協会，1977（昭和52）年
新潟市郷土資料館編『新潟市郷土資料館調査年報第９集　初代新潟奉行川村修就文書Ⅷ』新潟市郷土資料館，1985（昭和60）年
新潟市民謡連盟『新潟市民謡連盟　三十年のあゆみ』，1985（昭和60）年
新潟市役所編『新潟市史』新潟市役所発行，1934（昭和９）年
新潟総踊り祭実行委員会『第７回　にいがた総おどり　オフィシャルガイドブック』新潟総踊り祭実行委員会事務局，2008（平成20）年
新潟新聞，1912（大正２）年８月25日
新潟新聞，1923（大正13）８月
新潟毎日，1928（昭和３）年８月16日及び17日
新潟日報，1946（昭和21）年７月25日
新潟日報事業社編『新潟のまち　明治・大正・昭和』新潟日報事業社，1972（昭和37）年
日本放送協会篇『復刻　日本民謡大観　現地録音ＣＤ　中部篇１』日本放送協会1992（平成４）年
民俗藝術の会『民俗藝術』１巻８号地平社書房，1928（昭和３）年，復刻版は図書刊行会，1973（昭和48）年